

萬葉集十三人

都筑省吾

河出書房新社

萬葉集十三人

著者都筑省吾

昭和四十九年七月二十五日印刷 昭和四十九年七月三十日發行

發行者中島隆之

發行所株式會社河出書房新社東京都千代田區神田小川町三丁目六番地振替一〇八〇二番

印刷所中央精版印刷株式會社

製本所中西製本印刷株式會社

裝幀者榛地和 函寫眞山口道雄 本文寫眞佐々木高雄・柳原和夫



目次

卷頭第一首	七
抒情の誕生——齊明天皇の作品とその周辺	二三
鹿の聲——小倉山のこと	三四
天智天皇とその作品	三九
三山の歌について	四四
香具山に登る——「三山の歌」について、補遺	五一
天武天皇とその作品	五〇
星の歌一首	五三

額田王		二九
紀の幸——額田王作品一首案		二九
有間皇子		一〇
續有間皇子——萬葉集と日本書紀		一〇五
大津皇子		二〇九
磐余の池		二三
自由と死と——人麻呂の作品の本質について		三九
おのづからのすがた——「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌」について		三八
「三津崎隠江乃奴島」を尋ねて——柿本人麻呂作品一首案		三五
沼島行		二七五

高市黑人	二六七
黑人といふ人	三二〇
羈旅山下赤——高市黑人作品一首案	三二四
大伴旅人と眞實——酒を讀むる歌十三首について	三三二
社會詩人憶良	三四九
山部赤人論	三五六
山部宿禰赤人の歌四首	三八七
黒人と赤人	三九二
高橋蟲麻呂	三九八
「詠不盡山」歌一首并短歌」案——早春の頃に	四〇四

高橋蟲麻呂の長歌について	四二〇
--------------------	-----

家持斷想	四二六
------------	-----

大伴家持の作品	四三〇
---------------	-----

初版あとがき	四三九
--------------	-----

新版あとがき	四四一
--------------	-----

あとがき	四四二
------------	-----

索引	
----	--

萬葉集十三人

卷頭第一首

天皇御製歌

一 籠毛與 美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持 此岳爾 榮探須兒 家吉閑名 告沙根 盧見津
 山跡乃國者 押奈戸手 吾許曾居 師吉名倍手 吾己曾座 我許背齒 告目 家呼毛名雄母
 籠もよ み籠持ち ふくしもよ みふくし持ち この丘に 菜摘ます兒 家聞かな 告らさね
 そらみつ やまとの國は おしなべて 吾こそをれ しきなべて 吾こそませ 吾こそは 告
 らめ 家をも名をも

「家吉閑名告沙根」この二句、「家吉閑名 告沙根」この訓み（龜井孝氏）を取りたい。舊訓、早く、「家吉閑名告沙根」と訓んでゐた。

この二句、他に、「家吉閑 名告沙根」「家吉閑 名告沙根」など訓まれてゐる。どちらも、天皇、家を問ひ、名をも尋ねてをられるのである。兩説、そこが、同じである。が、後者は、前者の「家聞かな」を不可としてゐる。理由は、「家が聞きたい、名をおつしやい。」は、この短い歌謡の中では不自然である。「家をおつしや

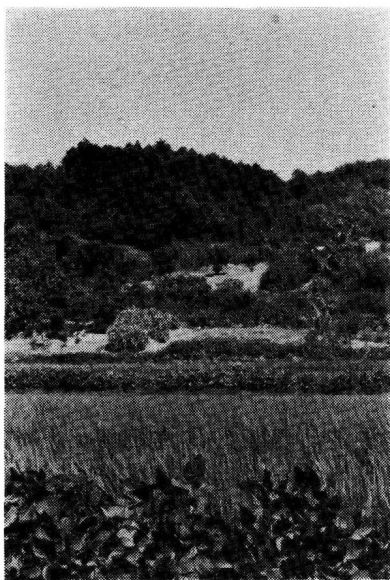
い。名をおつしやい。」であるべきである、といふのである。理由のもう一つは、家を尋ねる場合、「家を問ふ」であつて、「家を聞く」とは言はない、といふのである。

天皇、道に逢つた少女に思ひを寄せ、少女の家を問はれたのである。家を問ひ、名をも尋ねられたとするのは、訊問めきはしないか。この「家聞かな 告らさね」を受け、結び、「我こそは 告らめ 家をも名をも」がある。それとこれとは、相照應して、かくて、一首据わつてゐるのである。

「難波潟潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね」(一七二六)などに見るやうに、路傍で逢つたをとめに思ひを寄せ、をとこ、をとめの名を尋ねてゐる。尋ねられて名を明かすことは、領くことであつた。これは、當時の風であつたのである。「僕問ひて曰く、誰が郷、誰が家の兒等ぞ、若し疑はくは、神仙といふ者かといふ。」(松浦河に遊ぶ序)、「玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみ願さずありき」(八五四)などに見るやうに、同様の折、家を尋ねることも、名を尋ねると同じ意味で、當時、行はれてゐたのである。

が、なるほど、「家を問ふ」で、「家を聞く」とは言つてゐない。尋ねる意に用ゐられてゐた言葉は、専ら「問ふ」であつた。と言つても、「還言を聞かまく欲ふ(欲聞還言)」(舒明紀)などあつて、乏しい例ではあるが、「聞く」は、尋ねると同義に使はれてゐたのである。「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。」(論語)、「上士は道を聞きて、勤めて而して之を行ふ。」(老子)、これらの「聞く」は、どれも問ひ明かす意に用ゐてゐる。「家聞かな」は、あり得なかつた、とは言へない。尙、「家聞かな」この訓み、調べの上に變化を齎し、一首が單調になるのを救つてゐる。この點から言つても、この訓み、大事である。

「我許背齒 告目 家呼毛名雄母」結び、「新考」を取り、かう訓みたい。天皇、少女に家を聞かれた。少女、返事をためらつてゐる。そこで天皇、進んで自分が誰であるかを明かし、その上で、重ねて、「私は、言はう、



明日香清御原皇居跡

家も名もすつかり。」と言ひ添へられたのである。「家をも名をも」と、家と名と二つ竝べて強く言ひ添へられたのは、家を探ねられて返事をためらつてゐる少女に言はれた言葉として、且つ、一首の結びとして、利いてゐる。「我こそは」の「は」は、返事をためらつてゐる少女を前にしての「は」である。

ところが、家を問ひ名をも尋ねられたものとする、「家をも名をも」と、家に名を加へ強く言はれた言葉の納まりが、つかなくなつて終ふのではなからうか。そこで、調べを整へるため、「我許曾者背齒告目」など、言葉を借りて來なければならなくなつたり、他の訓みを案じたりしなければならなくなつたり、するのではなからうか。

他に、ここ、かうも言はれてゐる。天皇、少女に、自分が誰であるかを明かされ、明かしておいて、「我こそは 告らめ 家をも名をも」と言はれるのはをかしい。この訓み、間違ひである。かうも言はれてゐる。その上で、「我煮許背齒告目」「我許背齒告目」などの訓みが、案じられてゐる。が、これらの見方は、局部的に理を追つて、作品全體を、小さな窮屈なものにして終つてゐるもののやうに思はれる。

近鐵、朝倉驛で下車し、東、初瀬の方へ向つて初瀬川沿ひの道を二キロばかり行くと、左手、山裾のところに、「泊瀬朝倉宮跡」と言はれてゐるところがある。このあたり、黒崎と言ひ、田野がまはりに

擴がつてゐる。皇居跡の後方、左よりのところに、三輪山があり、三輪山と並んで三輪山の右に卷向山があるが、前の山が邪魔になつてゐて見えない。その黒崎の山邊を、この作品の成つたところとすることにして、目に描いてみる。うらかな春の一日である。天皇、皇居を出てそぞろ歩きをしてをられると、丘の上で若菜を摘んでゐる少女がある。天皇、その少女に言ひ寄られる。それが、この作品である。

少女、籠を下げ掘串を手にして丘の上で若菜を摘んでゐる。これが、第一段である。第一段、少女のさまを寫し、少女のをるところを言つてゐる。この作品、作者天皇が、路傍で逢つたところの少女に思ひを寄せ、少女の意を得られむとするのが本旨であるとすれば、少女のさまを寫し、少女のをるところを言ふを、要しない。それをしてゐるのは、この一首、第三者を前にしてうたはれたものであつたことを、語つてゐるのである。

第二段では、天皇、返事をためらつてゐる少女に、こちらから自分が誰であるかを打ち明けてをられる。しかも、それをするに、「そらみつ やまとの國は おしなべて 吾こそをれ しきなべて 吾こそませ」と、舞臺いづばいに大見得を切つてをられる。劇的である。このところも、抒情歌のやうではない。

第三段、第二段を受け、その上に立つて、「我こそは 告らめ 家をも名をも」と言ひ添へてをられる。この結び、三句、前にも言つたやうに、第一段の「家聞かな 告らさね」に對してゐる。以て、一首を結んでゐる。天皇、自分を明かされた。少女、この方が誰であられるかを、知つた。にも拘はらず第三段を、「我こそは 告らめ 家をも名をも」と訓むのは、重複である、と言つてこれを排するのは、これも前に言つたやうに、局部的な見方であり、散文的な見方であるのである。

ここ、重複の上に立つて、「我こそは 告らめ 家をも名をも」と言ひ添へてをられるのである。何遍も言ふが、この第三段、結び三句、第二段を受け、その上に立つて、第一段の「家聞かな 告らさね」に對してゐる。

るのである。貴女^{あな}は、家を明かすのをためらつていらつしやる。私は、かういふ者だ。私は、言はう、家ばかりか、家も名もすつかり。かう言つて、少女に返事を促してをられるのである。以て、一首を結んでをられるのである。

この作品、雄略天皇の御製として傳へられてゐたものと思はれる。神武天皇が、高佐士野で伊須氣余理比賣に逢はれたり、この作品の作者と同じ雄略天皇が、美和河のほとりで引田部赤猪子に逢はれたりしたことなどが傳へられてゐるが、相似たこととして思ひ合はされる。春の野は、當時青年男女にとつて楽しいところであつたのである。羅敷^{らふ}といふ美女があて、春の一日^{ひとひ}、綺麗な籠を持つて城南の一隅に桑の葉を採んでゐた。と、そこを通りあはせた長官、五頭立ての馬車を止め、人を美女に遣つて美女に言ひ寄つた。樂府古辭「陌上桑^{はくじやうさう}」にも、かういふ情景がうたはれてゐる。

一首、三段より成つてゐる。天皇、少女に家を問はれる。これが、第一段。少女が返事をためらつてゐるのを見て、天皇、進んで自分が誰であるかを少女に明かされる。これが、第二段。自分が誰であるかを明かした上で、天皇、私は、言はう、家も名もすつかり。かう言ひ添へて、更に返事を少女に促される。これが、結び、第三段。

萬葉集卷頭におかれてゐる作品第一首、この長歌、五七調が生ずる前のもので、短い句が、短長緊密に續けられ、線の太い作品を成してゐる。各句は、更に二音二音に刻まれ、内に快律を持つ。句間^{くかん}、段落間^{だんらくかん}に、間^まがあつて、各句各段の間に、抑揚がある。これらのことは、この作品が、謠ひものであつたことを示してゐる。又、それらのことに加へ、作中の人物が客觀的に描寫されてゐることは、この作品、振りを伴つたものであら

うことをも思はせてゐる。

この一首、すめらみことと若菜を摘んでゐる少女とのロマンスである。單純で、おほらかで、強い。大行なところと、庶民的なところが一つになつてゐて、微笑^{ほほえみ}しい。誰の心をも和^{なご}かにする、明るい素樸なものを持つてゐる。

おお 籠 いい籠を持つて おお 掘串 いい掘串を持つて この丘で 若菜を摘んでいらつしやる娘さん 家が聞きたい おつしやつて下さい この 大和の國は 残らず平定して 私がをる 限なく統治して 私が御位^{みくらゐ}につかせられてゐるのです 私は言はう 家も名もすつかり

抒情の誕生

——齊明天皇の作品とその周辺——

岡本宮御宇天皇の紀伊國に幸しし時の歌二首

一六五 妹がため吾玉拾ふ沖邊なる玉寄せ持ち來沖つ白波

一六六 朝霧にぬれにし衣干さずしてひとりや君が山路越ゆらむ

六五八年齊明天皇四年十月、天皇は、紀の溫泉（ゆ）になつてゐる。齊明天皇の紀の國幸は、これが初めてで、また終りでもあつたやうである。夫君舒明天皇には、紀の國幸のことは、なかつた模様である。随つて題詞にある「岡本宮御宇天皇」は、齊明天皇を申上げるものとしていい。

舒明天皇は、高市岡本に皇居を營まれ、齊明天皇も、その岡本に皇居を營まれてゐる。そこで舒明天皇を、（たけちをかものみやにあめのしたらしめしすめらみこと）「高市岡本宮御宇天皇」と申上げ、齊明天皇を「後岡本宮御宇天皇」と申上げてゐる。だが、齊明天皇を、「後」を略し、「岡本天皇」とも申上げてゐたことが、この作品の題詞によつて分るのであ

る。

この二首の作品の後には、「右の二首は、作者未だ詳かならず。」と、註が載せてある。二首、作者が分つてゐないのである。前の一首は、從駕の夫が、旅先紀の海で大和に残して來た妻を思つてうたつてゐるものである。後の一首は、大和に残つて家を守つてゐる妻が、旅先の夫を思つてうたつてゐるものである。作者は、夫と妻、二人である。それが、問答とか贈答とか唱和とかいふのではなく、それぞれ思ひ思ひに夫が妻を思ひ妻が夫を思つてうたつてゐるのである。それをひとつに竝べたのが、この二首である。竝べたのは、萬葉集の編者であらうか。そこでこの二首、果して一定の夫と妻との作品であらうか、それとも、餘處の夫の作品と餘處の妻の作品とを、編者がかうして竝べたのであらうか、など疑ひ出せば、一應問題になつて來る。だがその詮議は、今はしない。

遠い旅路にあつて家の妻を思ひ、家にあつて遠い旅路の夫を思ふことは、旅路の困難な時代にあつては、極めて自然のことであつた。況して人情、何の差挟むものもない時代であつてみれば、そのさま、想像に餘るものがあつたであらう。これらの時代に、旅路にあつて家の妻を思ふ夫の歌が生れ、家にあつて旅路の夫を思ふ妻の歌が生れたのは、當然のことであると言つていい。この二首、このたぐひの作品の最初のものであるかどうかは、分らない。だが、二首以後類歌は見受けられるが、二首以前に、先行作品と思はれるものは見當らない。

夫の作品、「妻のために、私は玉を拾ふのだ。沖べにある玉を、打寄せてここへ持つて來てくれ。沖の白波よ。」と言つてゐるのである。二句二句で切り、後の二句で玉を繰返し、結句で、波に呼びかけてゐる。素樸で、迫るものがある。妻の作品、「朝霧にぬれた着物を干しもしないで、ただひとりあなたが山路を越えてゐ